

■ 巻 頭 言 ■

新年を迎えて

エネルギー・資源研究会会長
東北大学学長



前 田 四 郎

本会も昨年新しく発足して、「1980年代の産業は?」とか「エネルギーは?」といった言葉を聞かされつつ、1年が過ぎて'81年を迎えることになってしまった。そしてこの1年を振り返るときに、心配された中東諸国の政情不安だけが現実となって出て来た以外エネルギー不安に対しては一向に解決の方向が見出せず、いたずらに声が高くなったばかりのように思える。

二次にわたる石油ショックで脅かされた我が国のエネルギーも何となく石油が高くなって物価に大きな影響を与え、経済界も一時的には大きな不安を感じたようであるが、現在は省エネルギーを行っている故か全体として小康状態にあり、何となくこのままで行けるのではないかというような安心感に似た空気が漂っているようである。現在の中東の紛争も石油備蓄の御蔭で大した影響はないと安心感をあおっている。このこと自体は誠に結構なことであるが、これであたかも日本のエネルギーがこのままやって行けると錯覚を抱かせたとすれば、これは誠に危険である。日本のエネルギー事情は根本的にはまだ何一つ改善されていないのは御承知の通りであり従って石油依存の形態をとりながら、そのすべてを海外依存による我が国の経済の不安定性は少しも本質的に変わっていない。

我が国の経済を安定化するためには、石油への依存の形態からの脱却であるのは明らかであり、現在各界でいろいろの論議が行われ模索中であるが、これといった名案はなく、気の短い日本人の通性で、やや疲れ気味のような気もする。

しかし考えてみればこれは当然のことであって、そもそも簡単に名案が浮ぶ程ことは簡単でなく、言葉を変えて言えばこれは人類あるいは地球の受けている大きな試練かも知れない。

現在の石油問題は人類共通の課題である。その解決には種々の要因が絡んで来るが、技術的問題に限って言えば、エネルギーは最終的には自然エネルギーやある種の原子力のような定常的に使える不滅の非枯渇性エネルギーの開発を目標とすべきことは論を俟たないが、これは根本的には種々の要因もあって極めて難しくそれに移行するには時間も要すると思われるので現在はその最終目標に対する探索と同時に、それまでの過渡的状态としての対策即ち代用エネルギーの開発や省エネルギーの方策を模索すべき時期であると考える。

ところで最近のこの方面の状態を少し離れた立場からみると、国中がいたずらにエネルギー不安という言葉に振り回されて騒いでいるとしか考えられない。

先程も述べたように人類の試練であってそう簡単には解決できないからといって悲観して放棄して済む問題ではない。しかし早く解決しなければ役に立たないといって浮足立つのはこれもまた誤りである。早いに越したことはないが、なにしろ相手はどの点をとっても不確実極まる石油の不足である。相手を見ながら、もっと腰を落ちつけて着実に知恵を絞り解決を図るべき問題である。

先日田中文相が「巨大科学充実へ行政の一本化」を提案しておられたが、これは平素苦々しく感じられることで誠に難しい問題と思うが官界としてはまず必要なことであろう。

学界や研究者にとっては先年公害が問題になったときにもやや機を逸したきらいがあるが、今後こそ人類社会に貢献する好期であると思う。いたずらに研究費獲得にはしったり、会議に疲れさせられることなく、今こそじっくり腰を落ちつけて将来に見とおしをつけて何を為すべきか真面目に考えて努めるべき時のように思う。誤った研究計画は思い切って捨てる勇気も必要である。(基礎研究が不必要というのではない。)

業界は何とはなしに放っておけば誰かがやってくれるというような安易な考え方でなく企業としてまず当面省エネルギーを第一として石油依存を少くし、併せて危機の当来を延ばしながら社会への貢献、経済の安定を考えながら企業の規模に応じて出来るだけこの問題の解決に協力すべきだろう。この分野の協力が最も大切なのは論をまたない。

元来エネルギーは、その形態にはいろいろあるが、各形態による価格とその価値、用途により使用すべきエネルギーの形態等についても、業界はもちろん一般民間にももっと知らせて節約を図るべきで、巷間言われているような、灯油が不足であるならば電力を使えばよい等というような考え方はやはり是正するようP.Rも必要であろう。

要はこの大きな試練に対して、右往左往するのではなく、もっと落ち着いて各人の持場を守り、各人の知恵を働かす絶好のチャンスと考えて冷静に、しかし真剣に取り組む必要があると考える。

本誌も更に情報交換を豊かにして、本誌なりに官・学・民間・三者一体となってこの問題の解決に進む一助になり得れば幸いである。

